これからの里山のあり方・つきあい方

香川　隆英
（森林総合研究所）

はじめに

里山ブームが我が国で起きてから、10年ほど経過した。これがよくある短期間のブームですぐしぼんでしまうのか、今以上に大きい広がりを見せて様々な領域に展開していくのか、もしくは沈静化しつつ持続的に根付いていくのかなど、今後の行方については私にもよく分からない。

里山に関わり、その魅力を里山のアメニティとして折にふれ喧伝してきたものとして、里山と人々の関係がより広がり、かつ根付いていくことを望むのはもちろんのことである。

少なくとも、以前のように大半の日本人が都市信仰に傾き、都市化こそすべて善であり、里山や田舎には何の魅力も価値も感じないということにはならないだろう。

すでに、里山での活動やふれあいを通して、様々な楽しみや発見、創造などその人の人生にプラスとなる要素を見いだしている人が少なからずいるからである。またそれらの人々が、その体験や繋がりをさらに後進に伝授していく可能性が十分高いと考えるからである（写真-1）。

里山とのつきあい

一方、里山との関わりには多くの負の面があることも否めないし、実際、里山管理などで関わった経験者こそがそれを体感してきているであろう。困難性について、幾つかあげられるが、たとえば活動の持続性、土地所有の問題、立地条件、経済性などである。

これらは、里山と人々の関わり方の違いによっても問題の所在が変わってこよう。ボランティアで関わる者には経済的な課題は少ないが、NPO等で関わるには、収益もあげていく必要がある。一方、我が国においてはヨーロッパ等と異なり、里山の適度な林内空間を保つためには、ササやタケ、草本の毎年の管理に多くの労働力を必要とするので、持続的な活動を困難にしている。そして、里山の多くは個人所有であるため、公園のように自由に人々が出入りし、利活用することはできず、所有者の意向に制限されることが多い。さらに根本的な問題は、所有者の相続時に里山が売却される危険性である。また、身近な場所に活動できる里山がある場合は良いが、都市住民にとって、ふれあう里山が電車や車で2時間もかかるところであれば、頻繁に行くことはできず、ついつい疎遠になってしまい、管理が粗雑になったり、逆に負担になったりするだろう。

このように、多くの負の面を強調すると、里山との持続的な関係が暗澹たるものに思われると困るが、谷津田と一

写真-1　里山の風景

KAGAWA Takahide
How to concerning with SATOYAMA in future

体となった伝統的風景や新緑や紅葉の景観の美しさ、鳥や昆虫など生き物の宝庫であり、美味しい空気や静けさなど五感を快適にしてくれる、そうした里山の魅力のために、いまだに里山とふれあう人は増えているのである。

ここでは、里山が身近にあることの大切さ、里山環境教育について、里山におけるNPO活動、そして終わりに里山を癒しの場・セラピーとして利用することについて述べていく。

里山は身近にあって欲しいもの

全国の小学校から歩いていける場所に、小規模でも良いから里山が配備されることが重要である。つまり、全国の小学区毎に里山を整備していかなければならないということである。そうすることによって、子供たちは親に連れて行ってもらうのでなく、自らの意志で気の向いたときに、歩いて里山に出かけていくことができる。つまり、子供たちは、日常的に里山の風景や動植物などの自然とふれることができ、ひいては子供たちの記憶の中に豊かな原風景を形成することが可能となる（図-1）。

原風景とは、親子や兄弟の関係のように常日頃強く認識することはなくても、心象奥深く消えることなく在り続ける、記憶であり感情である。この原風景が、人の成長過程以降の価値観や微妙な移り変わりを読みとれる風景観形成に大きく関与していく。物心が付くか付かない時期に形成される原風景は、その後の人の一生にとって大切なものであり、それはどれくらい豊かな風景体験を日常的に行えるかに掛かっている。同じ緑地でも都市公園では、完全に管理された人工的な空間で、子供たちの感性を刺激したり、育てたりする多様な発見や体験は望めない。そういう意味で、小学校区毎に里山があり、子供たちが行きたいときに里山に行き、生き物や風景を味わってくることが重要なのである。

里山環境教育

子供たちにとって、里山についての学習や里山を自分たちで体験することの必要性を筆者らが研究した事例がある。

茨城県のいくつかの小学校で、総合学習の時間に行なわれた森林学習の授業の前と後に、自由想起法により森林についてのイメージや遊びをアンケート調査した。さらに森林学習については、実際に歩いて行ける近くの里山を体験学習した学校と、教室内の授業だけで里山を学んだ学校に分けて、その差を比較した（写真-2）。

まず、小学校の立地条件の違いにより、都市部の小学校の子供たちは「公園」や「家の前」で遊ぶことが多く、農村部では「庭」で遊ぶことが多かった。都市部とは筑波研究学園都市であり、都市公園がよく整備されており、また住宅は緑道で公園と結ばれているため、家の周りに比較的緑地が多い。

農村部や旧住民の住宅は、庭やその空間の連続に屋敷

図-1　全国の小学校区に里山を

写真-2　里山体験学習

林や集落林、畑などが含まれる小規模な里山を有している場合が多く、住宅全体が広く、それが遊び場として十分機能しているのである。

ところで、森林のアメニティは人々の五感を快適にする環境要因から成っているため、子供たちのアンケート結果の項目から、視覚（明るい、光、暗いなど）・聴覚（静か、鳥の声など）・嗅覚(良い空気、においなど)・触覚(涼しい、ふわふわしているなど)・味覚の五感に関係する表現だけを拾い出して分析した。まず、子供たちの生活する立地条件の違いで、五感表現に差が現れた。都市部の小学校では、緑地の少ない学校の子供たちが最も五感表現が少なかった。一方、農村部の小学校の子供たちは、最も五感表現が豊かであった。

さらに、実際の里山体験学習が五感表現に及ぼす影響を見た。子供たちが体験した里山は、学校から歩いて10分程度の徒歩圏にあるクヌギ・コナラの大径木林である。この里山は、地域のボランティア団体により、下草が刈り取られており、歩道以外の林内を自由に行動できるアクティビティの高い空間となっている。

里山体験学習を行なった小学校の子供たちのアンケート結果からは、目立って五感表現が多くなった。特に大きく増加したのは「良い空気」などの嗅覚、「涼しさ」や「気持ちが良い」「すがすがしい」「軟らかい土」などの触覚に関してであった。触覚については、人数が増えただけでなく、五感に関する単語表現も多かったことが特徴である。また、「森の静かさ」などの聴覚、「日陰」「隙間の光」など視覚表現についても増加傾向が見られた。このように、里山体験学習によって五感表現が豊かになることは、子供たちの創造性を育み、知識だけでなく身体感覚を研ぎ澄ませることにも役立つ。今日では、農山村の子供たちでさえ、屋内に閉じこもって遊ぶ時間が増えてきており、今後ますます五感を養う里山での体験機会を増やしていく必要性が高まるであろう。

また、里山に出かけて体験するだけでなく、学校の校庭などを利用して自分たちで里山を作ることで、技術的な学習や体験が可能となる（写真-3)。自分たちで、学校林として校庭にコナラやシラカシを植栽して小規模な里山を作り、ビオトープなどとあわせ、自然の移り変わりを観察・体験するのである。自分たちが物作りを直接行なうという行為から、受け身でない積極的な自然への関わりの意識も芽生えることであろう。

写真-3　学校林を作る

里山NPO

里山に関わる市民としては、これまではボランティアやNGO中心であったのが、最近ではNPO（特定非営利活動法人）が関わる機会が増えてきた。その理由として、全国的に環境や福祉などの分野を中心に数多くのNPOが生まれたこと、里山など森林の多面的機能が少しずつであるが経済活動を伴うようになってきたこと、国や地方公共団体の公共事業等がNPOをも事業主体とするようになったことがあげられる。一方で、急拵えのNPOサイドは、里山の事業では経済性が低いこと、事業の継続性や予算の安定性が担保できないことなどから、里山への関与の困難性を訴えることが次第に多くなってきている。現在はこうした動きの過渡期といえよう。

NPO活動の一例を挙げる。霞ヶ浦流域の自然環境再生を活動テーマとしているNPO法人アサザ基金は、里山保全および資源活用と霞ヶ浦の環境再生を結びつけた事業を展開してきた。里山のコナラなどの枝から作った粗朶消波施設を湖岸に設置し、波をやわらげアサザの群落など湖岸植生の回復を図る事業である。雑木の枝から成る粗朶消波施設のメリットは、石積みやコンクリートと異なり、波の打ち返しが少なく湖底が掘られないこと、粗朶の間を水の流れが通るので水が澱まないこと、最終的に粗朶消波施設は風化していき、植生が回復すれば機能を果たして無くなるため風景を壊さないのである（図-2)。一方、霞ヶ浦流域の里山は、多くが平地林で開発されや

すいため、減少の一途をたどってきた。さらに、社会システムとして里山の資源活用がこの数十年行なわれなかったため、放置された里山は多くがアズマネザサの藪と化している（写真-4）。その貴重な里山を残し、機能を回復させるように管理していくために、里山から粗朶を採取し湖の環境再生に使うという、上下流一体となった新しい里山資源利用を、NPO法人アサザ基金が中心となって実施してきた（写真-5）。

おわりに

ー里山でセラピーをー

都市生活者等のストレス増加による様々な社会的問題が増大しており、また高齢化社会に移行するに当たって年間30兆円以上に及ぶ国民医療費の今後の負担問題も大きくなってきている。さらに、児童の不登校問題など現

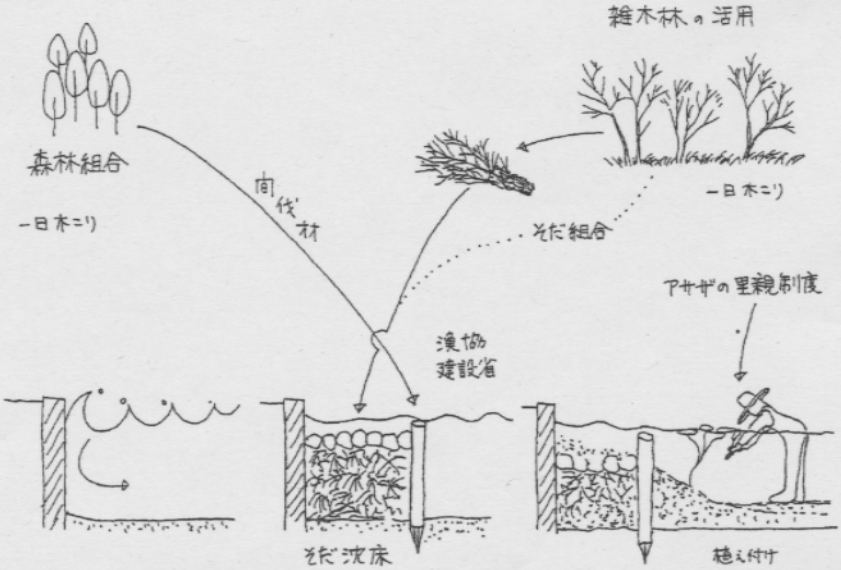

図-2　里山資源活用した粗朶消波施設

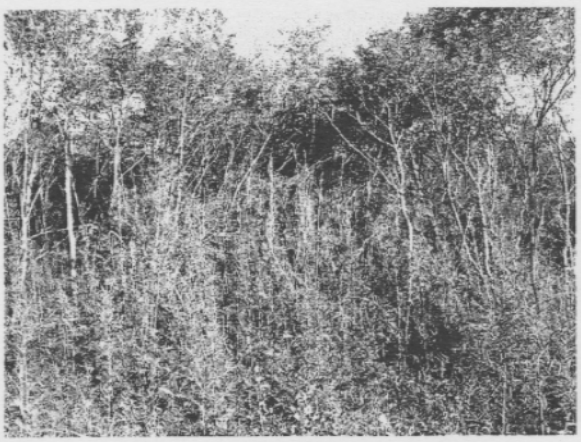

写真-4　アズマネザサで覆われた里山

写真-5　NPOによる里山管理

代社会において、各年齢層にわたり心の問題や生活習慣病等の身体的問題が山積しつつある。これらの課題に対して、森林浴によるセラピーなどの効果が近年期待されている。

林野庁においても、平成16年3月に厚生労働省と共同で森林セラピー研究会を立ち上げ、森林浴がもたらす生理的・心理的効果を科学的に明らかにし、森林セラピー関連の民間ベースの事業やセラピストなどの制度創設も視野に入れて、活動を開始しているところである。こうした森林浴効果の研究や商品開発も大切であるが、同時にセラピートレイルなど効果的な森林浴コースの整備の必要性も高い。

写真は、森林浴発祥の地といわれている、長野県の国有林にある赤沢自然休養林（写真-6）。ヒノキの200から300年生の天然林であり、優れた森林浴コースである。

今後は、森林療法を目的とした森林浴コースの整備やビジターセンター、インタープリターの配備などが有効であろう。それとともに、赤沢自然休養林のような遠い場所にある非日常の利用と、初めに記したような日常の小学校区毎の利用のためには、生活周辺の里山整備が必要である（写真-7）。歩いていける距離にある里山において、癒し効果のある森林浴コースがあれば、生活習慣病や子供たちの心のケアには好適であろう。

このように、里山に求められる多面的機能は、心の癒しや健康維持、リハビリなど都市生活が浸透した現代人にとって、精神面と身体面に良好な効果を及ぼす役割にも及んでいくことが予想され、そうなると里山ブームは、まだまだ大きな山が控えているように思う。

写真-6　赤沢自然休養林

写真-7　伝統的な里山景観

参　考　文　献

大越美香・香川隆英（2003）．子供の森林イメージと森林体験学習に関する研究．農村計画論文集（5）．259～264.

大越美香・熊谷洋一・香川隆英（2004）．里山における子供時代の自然体験と動植物の認識．ランドスケープ研究67(5)．647～652.

森林化社会の未来像編集委員会（2003）．2020年日本の森林，木材，山村はこうなる．（社）全国林業改良普及協会．東京.